

2. 坂内義雄 ものがたり・・・皆生温泉の育ての親

<皆生温泉の復活>

- ・ 有本松太郎氏が皆生温泉の生みの親とするならば、坂内義雄氏は皆生温泉の育ての親ではないだろうか。昭和9年10月資金的に行き詰まっていた、皆生温泉の泉源開発事業を引き継いだのが坂内義雄氏である。
- ☑ 伝承者 皆生温泉観光株式会社：「50年のあゆみ」
 - ✓ 京都市に在住し、日本証券株式会社、九州電気株式会社などの社長を務め財界の有力者であった。坂内氏は、当時のお金で30万円を増資するとともに、株式の過半数を得て経営権を持った。
- ・ 坂内義雄氏は、数多くの会社の役員を務めていたため、小村雄三氏を代弁者として社長に据え、次の二つの事業に取りかかった。
 - ✓ 新泉四号泉の開発
 - ✓ 娯楽センター「温泉クラブ」の建設
- ・ 昭和10年9月の波浪で一号泉が失われていたため、使える泉源は三号泉だけであった。そのため朝5時から9時まで、夕方は4時から9時までの時間配湯となっていた。
- ・ 昭和11年4月新泉4号泉を掘り当て、7ヶ月ぶりに時間配湯が解除された。しかし、この泉源は湯量も温度も満足いくものではなかったため、埋没した一号泉の内側10mぐらいのところで新泉開発を進めた。昭和11年8月有望な新泉の掘削に成功した。
- ・ この成功により皆生温泉始まって以来の24時間配湯が実現した。
- ・ 皆生温泉には、中心となる娯楽施設がなかった。会社はこのため「温泉クラブ」の建設を企画した。昭和11年5月三条通りの郵便局の海側に温泉クラブは完成した。大浴場、食堂、売店、休憩室、家族風呂などのほか、玉突き場などもある娯楽施設としてオープンした。折からの景気の好転もあって皆生温泉は活気を取り戻した。
- ・ 昭和12年の夏には会社は、海水浴場を始め、砂風呂を作り売店を出した。

<坂内義雄氏の素顔>

- ・ 坂内義雄氏の話の聞くと、みんな口をそろえて忙しい方だったの答えが返ってくる。
- ・ 皆生温泉観光で泉源の管理をしていた森野氏によると。
- ☑ 伝承者 森野寿夫氏：
 - ✓ 多忙であったため皆生には株主総会の時ぐらいしか来られなかった。当時坂内社長は、鉄鋼・硝子・温泉事業など約60社の会社と関係があり、分刻みのスケジュールであった。
 - ✓ 驚くほど発想も豊かであった。温泉の塩分で鉄がさびて困っていると聞いた坂内氏は、“鉄がダメなら真鍮で作ってみては”との提案をして下さった。自分たちには思ってもよらない発想であり、感心したことを覚えている。

- ・ 皆生温泉観光に勤務していた手島氏によると。
- ☑ 伝承者 手島孝氏：
 - ✓ とにかく耳の大きい方であったことを覚えているという。
 - ✓ 葬儀に参列したときのことを鮮明に覚えている。とにかく大きな葬儀であった。財界はもちろん、政治家や皇族の方まで参列されていた。ほとんどの参列者がモーニング姿であり、普通の礼服を着ていたのは伝承者だけだったので恥ずかしい思いをしたという。礼服の人がいたと思ったら新聞記者であった。(笑う)
- ☑ 伝承者 森野寿夫氏：
 - ✓ 坂内義雄氏を米子駅に見送りに行った時の話である。
 - ✓ いきなり駅長室に通されてびっくりしたことを覚えているという。
- ・ 当時、かなりの経済力や人脈を持っておられたようである
- ☑ 伝承者 岩佐甲子郎氏：
 - ✓ 坂内義雄氏は、とにかく松を切るなど言われていた。
 - ✓ 皆生温泉の良さは松林であることをしっかりと認識しておられた。今、皆生温泉の風情がなくなったのも、松林がなくなってしまったことも一つの原因である。

< 公衆浴場公園温泉 >

- ・ 皆生温泉には、開湯当時から地元の人たちのための公衆浴場が整備されていた。
- ・ 皆生温泉に公園を設計する際に、温泉浴場を建設することとなり、大正 11 年 12 月公衆浴場公園浴場が完成した。
- ☑ 伝承者 皆生温泉観光株式会社：「50 年のあゆみ」
 - ✓ 一階には 30 人入り位の男女各々の並等浴室、少し小さな男女各特等浴室があり、二階は 30 畳敷きの休憩室となっていた。
 - ✓ 料金は並等入浴一回大人五銭、特等十銭で、休憩室は茶菓子付きで十銭であった。
- ・ 林の中に立つ公園温泉の写真が残っているが、当時としてはとてもモダンな建物であったようだ。
- ☑ 伝承者 松浦茂氏：
 - ✓ 皆生の住民や米子市内から多くの人が集まってきており、みんな坂内さんには感謝していた。銭湯みたいな感じで 2 階は無料休憩所みたいな感じとなっており、お弁当持参で半日くらい時間をつぶしている人もいた。
 - ✓ ヘルスランドの前身のような存在である。

<ヘルスランド>

- ・ 昭和 34 年 4 月皆生温泉の真ん中に現れたのがヘルスランドである。
- ・ 当時、戦後から高度経済成長へと向かう時期であり、一般の人も旅行に行くようになってきた。特に、農協が企画する団体旅行や職場の慰安旅行などが急激に増えた時期であった。
- ☑ 伝承者 皆生温泉観光株式会社：「50 年のあゆみ」
 - ✓ 営業の概要は、入湯料大人 100 円、子ども 50 円、家族湯 45 分 5 人まで 100 円、貸室半日 6 畳 1 室 250 円、食堂は食券により販売、売店は現金販売、来館客は入湯料により入湯券を求めることにより入場できる。
 - ✓ 館内では自由に入浴ができるとともに、演芸場では演芸を見ながら休憩できる。その他デラックスな館内施設を適宜利用できる。ヘルスランドは、開館とともに近郊の団体客で意外にも賑わい、玄関前には連日貸し切りバスが数台並んでいた。
- ☑ 伝承者 藤田収康氏：
 - ✓ とにかくすごい人であった。町内会、農協などの団体が主で、各地から貸切バスで乗り付けてきた。泥落としの時期（田植えの後）に新見などから美保の関へ観光に行き、帰りにヘルスランドでご飯を食べるコースが一般的であった。
 - ✓ 地元の方は、日帰りのリクリエーションの場として親しまれた。温泉につかり、演芸を見ながら食事ができる。ゆっくりと一日を過ごせる場所であった。
- ☑ 伝承者 松浦茂氏：
 - ✓ とにかくすごいお客様だった。県内はもとより、広島、岡山などから団体客がバスで乗りつけた。お酒の納入業者としても大忙しであった。

<OUランド>

- ・ 昭和 54 年ヘルスランドの営業を引き継ぎ、温泉クラブの跡地にできた公衆浴場が開業した。この時、皆生温泉で温泉に入れる公衆浴場は、この公衆浴場と岡本氏が公園温泉の営業を引き継いでいた公衆浴場の二軒であった。
- ・ その公園温泉も昭和 60 年頃には営業を終えた。
- ・ ヘルスランドの解体から 14 年後の平成 12 年OUランドはオープンした。ヘルスランドのような娯楽施設を再び皆生に復活させるという思いから作られたものだという。
- ・ 皆生温泉観光の社長を務める坂内氏によると。
- ☑ 伝承者 坂内和孝氏：
 - ✓ 先代が亡くなる前にヘルスランドに替わる施設を皆生に作りたいとの思いを聞いていた。非常に厳しい状況であったが、先代の言葉が耳に残り計画に着手した。
 - ✓ 平成 8 年から建設計画に着手したが、試行錯誤の連続であった。地元の人に喜んでもらうために何ができるのか。ヘルスランドを今の時代によみがえらせるためにはどうすればよいのか。各地の温泉施設を視察したりして構想を練って、2 年後の平成 10 年にやっと実施計画が出来上がり工事にかかったと語る。

<海嘯（かいしょう）との戦い>

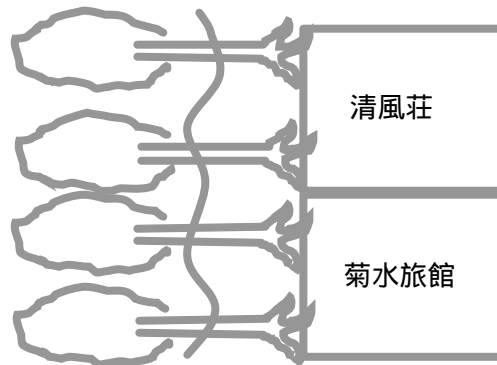
- ・ 皆生温泉は“海に湯が沸く皆生温泉”の名の通り、海からわき出した温泉であり、泉源の多くが海岸近くに位置している。開湯当時から温泉の泉源開発の現場では、多くの苦労があったようだ。特に、昭和10年前後から海岸の浸食が激しくなり、皆生温泉はたびたび海の恐怖にさらされるようになった。
- ・ 当時、海の浸食は温泉旅館のみならず、地元住民たちにとっても大いなる驚異であり、地域一丸となって海と戦っていた。

☑ 伝承者 皆生温泉観光株式会社：「50年のあゆみ」

- ✓ 昭和15年9月の大波浪浸食は岩佐旅館、菊水旅館の建物を流出の危機にさらした。
- ✓ この時、陸軍病院の衛生兵をはじめ福生、福米、車尾の警防団が出動し、折から滞在していた大刀洗航空隊員らも協力して土嚢、河馬、松枝などを組んで防護に務めた。

☑ 伝承者 松浦茂氏：

- ✓ あの時の大波浪は鮮明に覚えている。岩佐旅館と菊水旅館の座の下まで波が押し寄せてきた。皆生の住民が総動員して旅館の流出を食い止めた。近くの松林の松を根っこごと抜いてくる。そして、旅館の座の下に根っこのほうから突っ込んだ。
- ✓ 旅館は吹き出しをして住民の好意にこたえたという。



☑ 伝承者 皆生温泉観光株式会社：「50年のあゆみ」

- ✓ 昭和16年12月13～15日の大海嘯は金波楼以東の砂浜を30mも決潰後退させ、金波楼、金魚亭のコンクリート塀も流失した。
- ✓ 昭和17年2月5日の大波浪浸食は、ついに海岸旅館の金魚亭の一部を流出させた。